

嶺田遺跡

(昭和56年度一級河川丹野川)
(埋蔵文化財発掘調査報告書)

1983

建設省中部地方建設局
静岡県教育委員会
小笠町教育委員会

嶺 田 遺 跡

(昭和56年度一級河川丹野川)
(埋藏文化財発掘調査報告書)

1983

建設省中部地方建設局
静岡県教育委員会
小笠町教育委員会

序

文化財の保護保存が今日国民的課題として重要視されて来たことは、豊かな国民性を育て貴重な文化遺産を守ることによって、文化の香高い社会や地域づくりが私達の郷土の発展につながることを考える時、地域住民が協力して今後大いに努力しなければならない問題と云えるでしょう。しかし時にその中でも埋蔵文化財の発掘調査は、多額の経費と専門技術を必要としますのでいざ実施するとなると極めて困難な問題が多いのであります。

当町の一級河川菊川水系の河川改修工事は建設省の直轄工事として、永年に当たり多額の国費を以て継続施工していただいている事業であります。56年度に支流丹野川の護岸工事が実施されることとなりましたについて、該当地域は横田式土器のかつて発見された埋蔵文化財の周知の包蔵地でもありますので、遺跡の発掘調査が必要となった次第であります。

建設工事の工期や予算の問題など多くの隘路があったにも拘わらず、中部地方建設局・浜松工事事務所関係の方々の文化財行政に対する深い御理解と、御多忙の中を発掘調査事業指導のため専門職員を御派遣下さった県教育委員会文化課の御高配によって、この調査は予定通り完了し、57年3月には概報が発刊されました。そして本年一ケ年かけて出土品の整理や調査書のとりまとめが進められました。

この調査のため寒風吹く中を現地作業された文化課の先生方、建設機材や労務の提供に積極的に御協力いただいた南部建設さん、予算措置のため御配慮いただいた建設省の方々のお陰でこの調査は完成しこの報告書ができたのであります。御協力いただいた皆様深く感謝する次第です。

昭和58年3月

小笠町教育委員会
教育長 松山昌宏

例 言

1. 本書は昭和56年12月8日から昭和57年1月7日までに実施された、静岡県小笠郡小笠町赤土1920番地の1地先に所在する嶺田遺跡発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、建設省中部地方建設局が委託者となり、小笠町が受託者、静岡県教育委員会が指導機関となって実施したもので、「昭和56年度一級河川丹野川埋蔵文化財発掘調査業務委託」とした。
3. 調査主体は、小笠町教育委員会で、調査担当には静岡県教育委員会文化課指導主事植松章八があたった。
調査には青野富士夫・山田元広の参加を得るとともに、「小笠町郷土研究会」の諸氏に種々の教示・援助を得た。
4. 本書の執筆は次の通りである。
第1章・第3章……………青野富士夫・佐藤達雄
第2章・第4章……………植松章八・足立順司
第5章……………植松章八
5. 資料整理は主として青野富士夫があたり、佐藤達雄・渡辺康弘・丹島かつ子がこれを援助した。
6. 本書の編集は植松があたった。
7. 出土資料は小笠町教育委員会が、図面・写真類は、静岡県教育委員会が保管する。図面類はマイクロフィルムを作成し、スライドは2部作成し両方で保管する。
8. 本調査及び本書刊行に関する事務は小笠町教育委員会があたった。

目 次

序	
例 言	
第1章 調査の経過	1
第1節 調査にいたる経過	1
第2節 調査の方法と経過	3
第2章 環 境	4
第1節 自然環境	4
第2節 人文環境	6
第3章 遺 構	8
第1節 土層の観察	8
第2節 溝状遺構	8
第3節 土壇	12
第4節 その他の遺構	12
第4章 遺 物	14
第1節 土器	14
第2節 銭貨	20
第3節 その他の遺物	20
第5章 ま と め	23

挿 図 目 次

第1図	位置図	1
第2図	周辺環境図	5
第3図	周辺遺跡分布図	7
第4図	土層基本図	8
第5図	遺構全体図	9
第6図	溝状遺構実測図	11
第7図	土坑実測図	13
第8図	土器実測図1	15
第9図	土器実測図2	16
第10図	土器実測図3	17
第11図	銭貨拓影	21
第12図	石器実測図	22

図 版 目 次

- 図版 I 周辺環境（航空写真）
- 図版 II 遺跡全景（西より）
- 図版 III 遺跡全景（北より）
- 図版 IV A 東区発掘区全景（西より）
B 東区発掘区全景（南より）
- 図版 V A 東区発掘区部分西側（北より）
B 東区発掘区部分中央（南より）
- 図版 VI A 柱穴列
B SD01
- 図版 VII A SD03・SD04・SP01
B SD02
- 図版 VIII A SD04
B SD05
- 図版 IX A SP01
B SP02
- 図版 X A SP03
B SP05
- 図版 XI A SP04
B SP04 遺物検出状況
- 図版 XII 柱穴
- 図版 XIII A 土器出土状況(1)
B 土器出土状況(2)
- 図版 XIV A 土器出土状況(3)
B 土器出土状況(4)
- 図版 XV 土器
- 図版 XVI 土器・石器
- 図版 XVII 銭貨

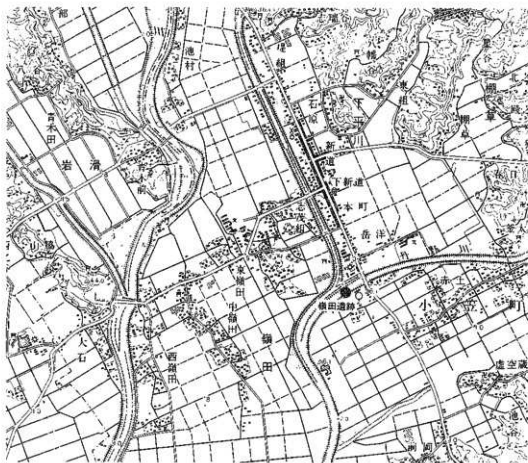
第1章 調査の経過

第1節 調査にいたる経過

額田遺跡は菊川流域に発達する広大な平野部にあって、菊川の支流である牛瀬川に、黒沢川と丹野川が合流する付近に位置する。

昭和29年8月、岳洋中学校の社会科研究クラブによって、標高5m前後の牛瀬川改修工事の跡地で壺形土器ほかが発見された。この壺形土器は、弥生中期の優品で、現在町郷土資料展示室に保管されている。その後、久永春男氏によって額田式の標式土器とされたものである。

本遺跡付近は、菊川流域においてもよく知られた洪水地域で、そのため堆積土はきわめて厚い。額田式土器の発見は地表下4m前後と伝えられ、そのため遺跡の範囲はきわめて不明瞭でし



第1図 位置図

かない。現役場付近から三河川の流路付近が広く遺跡地であることは確実としてよいが、その範囲を表面調査によって推定することはかなりむずかしい状況である。

昭和56年9月、建設省中部地方建設局浜松工事事務所によって、丹野川護岸工事が開始された。10月になって、「崩田遺跡内で河川工事が実施されている」との指摘があり、県教育委員会文化課では事態を重視し、工事の中止を要請するとともに職員を派遣し現地をみるとともに、その取り扱いについて関係者と協議をはじめた。10月16日、建設省・県および町教育委員会による三者協議が持たれた。

協議を重ねた結果、11月5・11～13日の4日間、工事予定地内における確認調査が実施された。この確認調査着手時の状況は、いわゆる「洪水敷」が工事対象地で、予定範囲160mほどの下流側100m前後は現地表下2m余が掘り下げられており、上流側60mほどにのみ地表面が残存していた。ここに下流側3箇所、上流側7箇所の試掘グリッドを設定して発掘した。その結果、下流側では弥生式土器細片が最下層の砂層中から出土したがそれは洪水等によって流出した状況であって、いわゆる遺構面とは認められなかった。それに比して上流側では上層から古墳時代土器を中心にかついな遺物出土がみられて、遺跡と判断された。

この結果、上流側60mについては、本調査が必要であると判断され協議の結果、12月8日から調査に入った。

第2節 調査の方法と経過

本調査は12月8日の排土作業から開始された。主に西側と南側に遺構確認のための拡張を図ったもので、重機による表土除去には、2日間を要した。併行して、すでに排土を完了していた東側については遺構検出を主体に調査を進めた。この部分でピット10ヶ所あまり、土坑遺構Ⅰ、溝状遺構Ⅰを検出した。

12月10日以降は重機による排土が完了したため発掘区の土層確認と平面による遺構精査を主体に作業が進められた。発掘区の東側には比較的遺構が多く認められるが、西側部分は、自然堆積と思われ、遺構らしきものは現在のところ確認できない。便宜上、東区と西区に分けて調査を進める。東区では、東半で住居跡様の落ち込みが認められ、こしき等が検出されている。

11日にはベルトコンベアー2台を搬入して排土を効率化するとともに、遺構検出につとめた。

遺構検査には12月14日までを要した。遺跡の東側では溝状遺構、土坑、ピット等が確認されたが、西区では遺構がやや薄い状況で、遺跡全体が東側に集中しているものと観察された。そのため翌15日には、西側の掘り下げに併行して、東側において遺り方設定の準備に入り、個々の土坑、溝、ピット等の完掘と測図・写真撮影を行った。

調査区は全域に10m×10mのグリッドの網をかけ、北よりA・B、西より1・2・3…とし、両者の組み合わせで呼称し、遺物等の取り上げもこれに従った。

12月16日以降になると西側には遺構がきわめて薄く、全体が東側に集中していることがほぼ確定的になった。17日には水準点の移動とグリッドの設定に着手。本格的な平面実測の準備を進める。遺り方レベルを標高5.30mに設定した。この間、個々の遺構については検出と同時に土層断面の観察・測図・写真撮影を併行した。また土器散布・焼土塊等の出土状態から、一応住居跡の可能性も配慮してその検討を合わせて、作業を継続した。

12月20日までは遺跡全体の遺構確認を終え、翌21日には遺跡全景写真撮影の準備と併せて、個々の遺構の完掘と撮影を行った。

なお12月18日には現地説明会を実施して、「小笠町郷土研究会」メンバーをはじめ、多くの町民の参加を得た。

各遺構における完掘・清掃作業と作図作業とは併行して進められたが、その完了には12月22日までを要した。遺構全体の平面実測(20分の1縮尺)には12月23・24日の2日間をあてた。24日平面図作成ののち、遺物を取り上げ、最終写真を撮影し古墳時代遺構面の調査を完了した。

下層の弥生時代包含層の確認調査は翌57年1月6日～7日に実施した。Ⅱ層を掘り下げⅢ層(青灰色粘土層)上面で精査する。さらに掘り下げ西側は古墳時代遺構面より1.3m、東側では1.8mあまりで砂層となる。遺物は少量の弥生式かと思われる土器片の出土を見たが、遺構の存在は認めなかった。下流側同様、砂層に混入した流出土器と観察された。

第2章 環 境

第1節 自然環境

嶺田遺跡は菊川流域に発達した沖積平野のほぼ中央に位置する。遺跡周辺は菊川の支流である牛淵川が、黒沢川・丹野川と合流する付近にあたる。また、遺跡をとりまく低平な丘陵は新生代第三紀から第四紀にかけての地層が順に、しかも広く分布するところから、日本の新生代第三紀系の標準層序発達地域として、古くより知られている。^{註1}

これらの丘陵は比較的開析が進んでおり、開析谷や菊川・牛淵川・丹野川の形成した自然堤防上や微高地に集落が営なまれている。

集落の形成も小笠町の自然環境に規定され、大別してつぎの3つの類型に別けることができる。

1. 沖積地の微高地や自然堤防上に立地する集落。
堂の新田・赤土・大石・嶺田・上平川・下平川
2. 丘陵や丘陵の谷間、谷の入口部に立地する集落。
川上・丹野・目木・榎草
3. 両者が複合する集落。

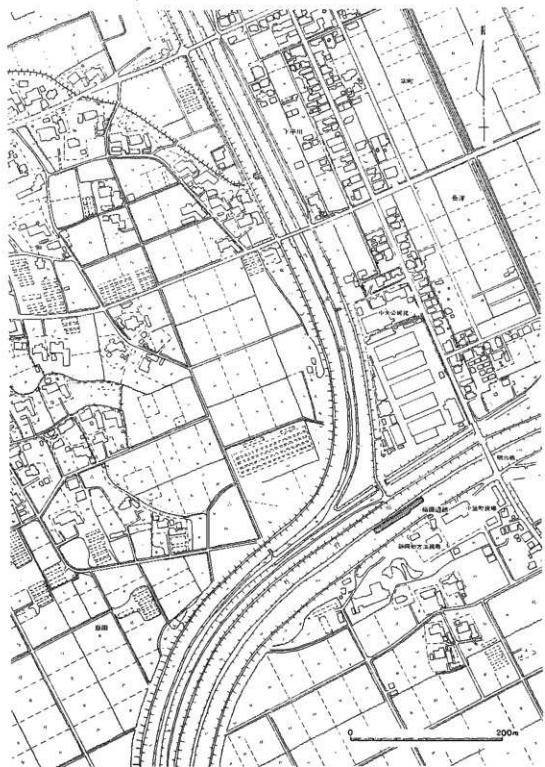
河東

このような集落形成の背景には、菊川平野の水利と沖積地への水稲耕作が、また、牧ノ原台地には茶園が営なまれたことを反映している。

嶺田遺跡をとりまく菊川平野は遠州海岸平野の一角をしめるが、その原地形はヴィルム氷期以降の海退現象に起因している。この海退現象によって菊川・牛淵川・上小笠川・下小笠川・丹野川などの各河川に深く広い開析谷がつけられた。縄文海進によってこれらの開析谷は、遠州灘の海湾となった。

その後の海退現象によって、菊川・牛淵川などにみられる低位段丘が形成され、今日の菊川平野が形成されたと考えられる。また、菊川平野の形成時期については、菊川町白岩下遺跡出土土器によって、ほぼ縄文中期前半には、すでに一部が陸化していたことが考えられる。^{註2}

しかしながら、遺跡周辺では、南山村近まで潟湖の一部が近世まで残存しており、近世以後、新田形成がなされたと言われている。このように両者の地形上の違いをみると、菊川平野南部が縄文海退以後、一部に潟湖を残しながらも形成されていったものと判断されよう。



第2圖 周边环境图

第2節 人文環境

菊田遺跡の東側、牧ノ原台地西南に所在する川上原遺跡では、細石器・尖頭器などが発見されているといわれ、^{註3}小笠町周辺の始源を知るうえで、一つの手掛りとなっている。縄文時代以降になると、牛淵川の上流で押形文土器が採集されるなど、やや具体的にその歴史の足あとが認められるようになる。縄文中期に入ると遺跡は菊川平野をとりまき丘陵上や台地上に形成されるが、近年、白岩下遺跡のように沖積地にまで縄文時代の遺跡が発見され、菊川平野の形成過程を知る上で、一つの材料を提供した。

弥生時代に入ると、農耕文化の伝播とともに、沖積地への遺跡の形成が認められる。また、弥生中期の低湿地遺跡では現地表より3～4m下に埋没しており、海水準の変化と深く係わりをもつとされている。嶺田遺跡より北へ6kmの位置にある白岩遺跡は、弥生中期中葉より古墳時代初頭まで富なまれた遺跡であるが、出土した土器により、嶺田遺跡とともに遠江地方の標式的遺跡とされている。

弥生後期に入ると、丘陵上や、段丘上にも遺跡は進出し、各河川に沿っていくつかの遺跡のまとまりを示す傾向がある。おそらく、このような遺跡のまとまりは、小河川を1つの単位とする弥生時代の水田経営を反映するものと思われる。

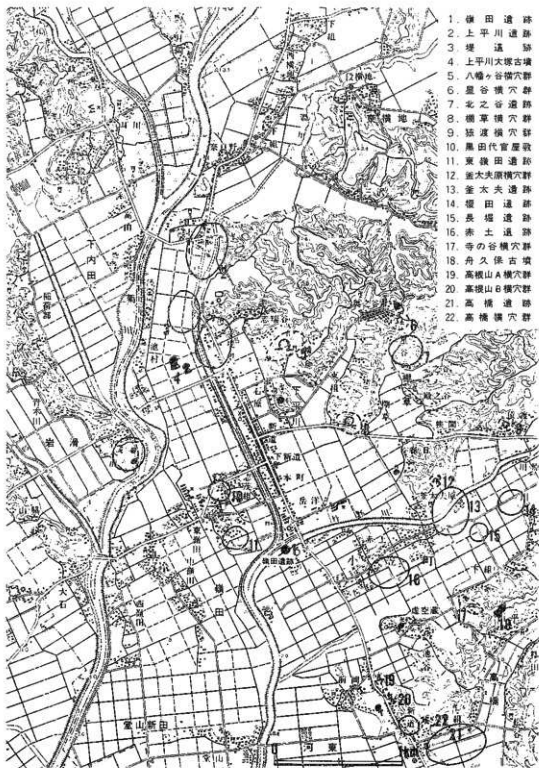
その後、古墳時代に入ると、下平川大塚古墳が出現する。この下平川大塚は、三角縁神獣鏡など3面の鏡などが出土し、菊川流域では最も有力な古墳の1つに数えられる。^{註4}

また、小笠町高橋の低丘陵上に存在する舟久保古墳は、全長49m・後円部径26m・後円部高3.5m・前方部長さ23m・前方部巾25mを測る古墳で5世紀前半に築造されたと考えられている。^{註5}

このように小笠町周辺は菊川流域においては、いち早く古墳の成立をみた地域である。しかしながら、その後の展開については、あまり有力な古墳は認められず、6世紀後半から出現する横穴群を待たなければならない。小笠町周辺の横穴群の形成は、現状では宇洞山横穴群の最古とするが、その中心は7世紀前半～中頃であり、須恵器・土師器などの土器類のほか、土器や少数の土器類をもつものがほとんどで、むしろ地方の共同体集落の共同墓地的色彩が強い。

表1 周辺遺跡地名表

遺跡番号	遺跡名	時期	之地	遺構・遺物	遺跡番号	遺跡名	時期	之地	遺構・遺物
1	嶺田遺跡	弥生～近世	沖積地	土器、陶器、石器類	12	岩太火原横穴群	古墳	丘陵斜面	
2	上平川遺跡	古墳	“	埴土、土師器	13	岩太火原遺跡	古墳・古墳	沖積地	土師器、須恵器、土師
3	嶺田遺跡	“	“	土師器	14	嶺田遺跡	弥生・古墳	“	弥生土器、土師器
4	上平川大塚古墳	“	“	鏡、勾玉、碧玉類	15	長瀬遺跡	古墳	“	壺穴住居跡
5	八幡ヶ谷横穴群	“	丘陵斜面	“	16	舟久保遺跡	弥生	“	弥生土器
6	鹿谷横穴群	“	“	“	17	舟久保古墳	古墳	丘陵斜面	須恵器
7	北之谷遺跡	弥生	丘陵	弥生土器	18	舟久保古墳	“	丘陵上	前方後円墳
8	柳ヶ原横穴群	古墳	丘陵斜面	“	19	高野山A横穴群	“	丘陵斜面	
9	嶺田横穴群	“	“	須恵器	20	高野山B横穴群	“	“	
10	高野山C横穴群	中世～近世	沖積地	“	21	高野山遺跡	弥生～古墳	沖積地	壺穴住居跡・弥生土器
11	舟久保遺跡	弥生	“	弥生土器	22	高野山横穴群	古墳	丘陵斜面	



1. 旗田遺跡
2. 上平川遺跡
3. 埴田遺跡
4. 上平川大塚古墳
5. 八幡ヶ谷横穴群
6. 星谷横穴群
7. 北之谷遺跡
8. 橋草横穴群
9. 猿渡横穴群
10. 黒田代官屋敷
11. 東横田遺跡
12. 釜大夫横穴群
13. 釜大夫遺跡
14. 豊田遺跡
15. 長堀遺跡
16. 赤土遺跡
17. 寺の谷横穴群
18. 舟久保古墳
19. 高根山A横穴群
20. 高根山B横穴群
21. 高橋遺跡
22. 高橋横穴群

第3図 周辺遺跡分布図

第3章 遺 構

第1節 土層の観察

本遺跡の基本層序を、次のように整理した。

I層・表土、全体に薄く、工事による盛土とII層との間にわずかにみられる。工事により削り取られたものか。

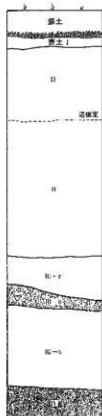
II層・黄褐色粘土層。表土より40～50cm下部においてこの黄褐色土に切り込んだ暗褐色土を覆土にした遺構を確認している。(全体に粘性が強く乾燥した場合には非常に硬質に変化する。管鉄を含み、部分的に旧河川の流路と思われる擾乱が著しい)

III層 a・青灰色粘土層。遺跡の西側に拡がりほぼ遺跡中央部でIV層 bが顕われるが、基本的にはIII層 cともに青灰色の粘土層で包括できる。III層 aからIII層 bへの変化は漸移的に移行する。

III層 b・黒色粘土層。遺跡中央部より東側に堆積する。青灰色粘土の間にベルト状に混入している。

III層 c・暗青灰色粘土層。青灰色粘土最下層、III層砂層への漸移層と考えられる。砂混じりで、III層 aに比して若干暗い色調を呈する。

V層・砂層。丹野川の河床と考えられる。遺跡中央部で全体に細かい砂粒が多くなる。



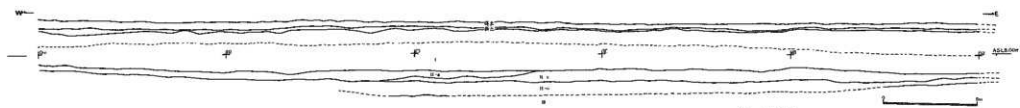
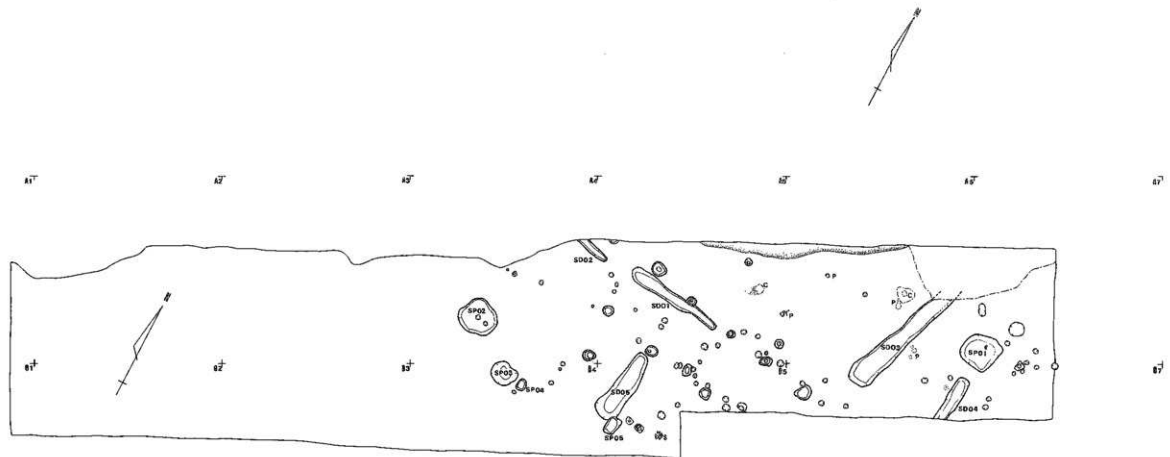
第4図 土層基本図

第2節 溝状遺構

SD01～SD05の5本が検出された。そのうちSD01とSD02は長軸を北西方向にして、ほぼ直線上に位置する。SD03・SD04は並列し、SD03・SD04・SD05ともにSD01・SD02の直列に対しほぼ直角に位置する。従って長軸方向は北東を向く。SD02・03・04は区外に延びるが、擾乱のために途切れている。

SD01

東側発掘区のはほぼ中央に位置する。(A5S) 最大巾75cm、深さ24cm、長さ5.35mを測る。東側が狭く、西側が巾広くつくられている。覆土は暗褐色土で溝内より拳大から人頭大の礫が検出されている。



- 1層 黄褐色土層
- 2層a 黄褐色粘土層
- 2層b 黄褐色土層
- 3層c 暗褐色粘土層
- 4層 砂層

第5圖 全体圖

SD02

SD01と同方向で北側に延びる。巾50cm、深さ15cm。西側は区外に延びており、全長は不明。現長で1.5mあまりである。覆土は暗青灰色粘質土で上部に炭化物が著しく認められる。

SD03

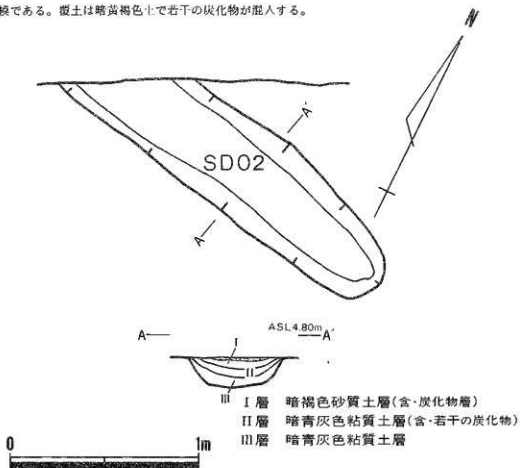
東区でも東端(B6、A6グリッド)に位置し、南北方向に延び、北側は区域外に続いている。巾72cm、深さ20cm、現長6.3mである。暗灰色粘質土を覆土とする。炭化物を多量に含み、土器細片が若干検出されている。

SD04

SD03に並行して走る溝で、両側区域外に延びている。巾82cm、深さ18cmで現長2.3mである。覆土は暗褐色粘土で、遺物等は全く検出されていない。

SD05

東区はほぼ中央(B5N、A5S)に位置し、南北方向に延びる。SD02・SD01とはほぼ直角方向に延びている。中世土壇SP05によって切られる。巾約1m、深さ21cm、長さ3.62mの規模である。覆土は暗黄褐色土で若干の炭化物が混入する。



第6図 溝状遺構突測図

第3節 土 塚

SPとして5基を認定し、番号を付した。SP01、SP02は他遺構と同時期の平安時代、他の3基を中世土塚と認定した。

SP01

長径193cm、短径183cm、深さ22cmの不整形な楕円形を呈する。覆土は上下2層に分層でき、上層は暗黄褐色上で厚いところで13cmをはかる。下層は暗褐色粘質土で炭化物・土器細片を若干含む。

SP02

東区の西端(A4グリッド)に位置する。長径2.2m、短径1.75mの不整形な皿状を呈する。底面で柱穴2を確認、SP02に伴うものであるか否かは不明瞭である。いずれも覆土は同様の暗褐色土である。

SD03

長径1.40m、短径1.15mの不整形な楕円プランである。深さは17.3cmを測り覆土は上下2層に分層できる。上層は黄褐色土、下層は暗褐色土で、いずれも土器細片炭化物を含む。古銭が1枚検出されている。

SP04

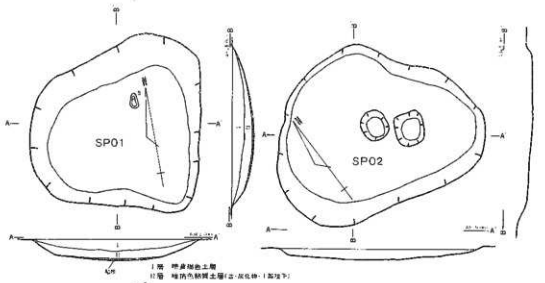
SP03の東に接して位置する。長径85cm、短径60cmの楕円形のプランである。覆土は焼けており、上部が橙褐色で下部へ黒色、茶褐色と変化し、焼度のかなり高かったことを思わせる。骨粉がかなり含まれており、開元通宝、元祐通宝2を含む古銭が6枚検出されている。中世の墓塚と考えられる。

SP05

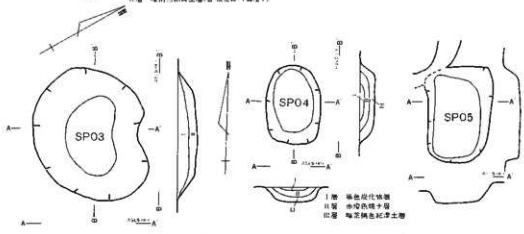
長辺100cm、短辺55cmの略方形を呈する。覆土は暗褐色粘土で多量の炭化物に焼土ブロックと骨片が含まれる。明道元宝など古銭が3枚検出されている。

第4節 その他の遺構

柱穴状のピットが多数検出されている。中には径60cm、深さ60cmもあり、柱痕の残存するものも認められる。東区の中央部分ではSD01に併行して柱穴が並んでおり、建物を想定できないかと検討を加えたが、掘立柱建物として認定しSHの番号を付すにはいまひとつ疑問であった。

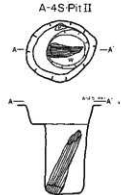
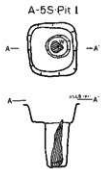


1 层 暗紫色土層
 2 层 暗褐色黏土層(含灰砂、土粒等)



1 层 褐色灰化壤層
 2 层 赤褐色壤土層
 3 层 暗褐色黏土層

1 层 黄褐色土層(含灰砂、土粒等)
 2 层 暗褐色土層(含灰砂、土粒等)



第7图 土坑实测图

第4章 遺物

第1節 土器

昭和56年度に発掘調査を実施した横田遺跡から出土した遺物は、若干の弥生式土器細片をのぞくと、土師器・須恵器・施軸陶器などの容器類と若干の鉄器・鍍貨などに大別される。

容器は、その年代や焼成方法の差異によって、土師器・須恵器・施軸陶器に大分類を行い記述したい。なお、個々の特徴については別表の観察表の記述にゆずることとした。

土師器

出土した土師器はつぎのように細分される。

第1類 五領・和泉併行期

第2類 古墳時代後期後半

第3類 奈良時代及びそれ以降

第1類の土師器は細片が多く、壘形土器3点を図化できたにすぎない。

第8図-1は、胴部下半に最大径をもつ器形で弥生土器以来の在地的伝統を受けついでものであるが、底部中央が凹むなど、古式土師器としての特徴も認められる。器面の保存状態が悪いので調整痕などは観察不能な点が多いが、内面をハケ目調整、外面をヘラ調整で施していると考えられる。残存する部分については文様は観察されていない土器である。

第8図-2は、球形の胴部を丸底の土器で胴部以下が残存しているにすぎない。内外面とも指頭痕が認められるほか、調整痕は観察不能な点が多い。

第8図-3は、平底の底部であり、詳細は不明である。

第8図-12・13の高杯は坏部が欠損しているので、詳細は不明であるが、円柱状でラッパ状に握部を広げるなどの特徴は、森町観音堂第2号墳の例に近似しており、当遺跡では第2類の7世紀中頃を中心とする時期に比定できよう。

第8図-7・9～15の壘は、口径にバラエティがあるものの大きく外反する口縁部をもつなど、同じ特徴をもっている。第8図-4・5の底部をみると、薄い岩城の平底の例であるが、これらが先の壘と同一のグループであるかの判断はできなかった。7世紀後半～8世紀代に比定できる。

第9図-19・20のコシキは、上向きの角状の把手がつけられており、底部から口縁部にかけて直立気味になった器形である。当遺跡では第2・3類いずれかに分類できるとと思われる。

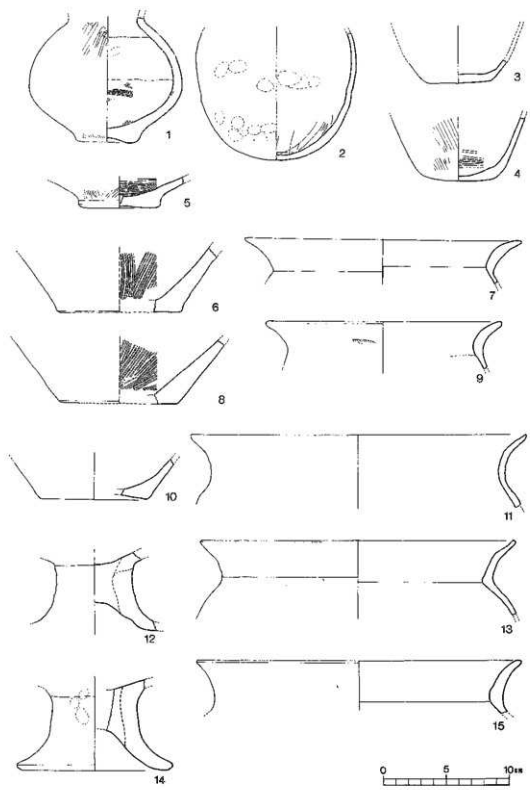
須恵器

須恵器はつぎのように細分できる。

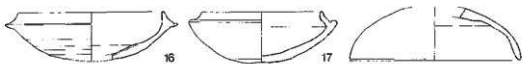
第1類 古墳時代後期後半

第2類 奈良時代

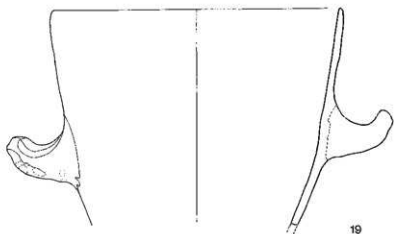
第9図-16・17の坏身は底部と体部の境界にヘラ削り調整が認められるほか、横ナテ調整であ



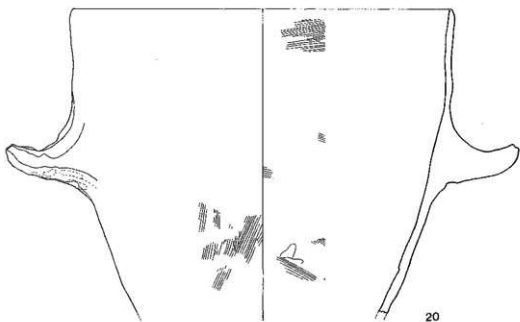
第8圖 土器実測圖 1



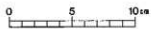
18



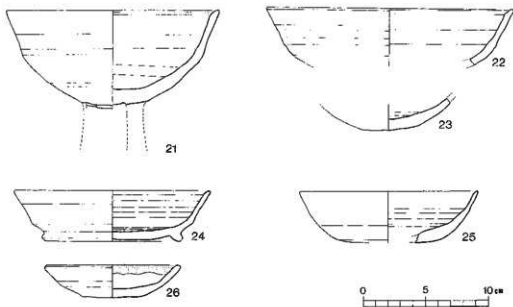
19



20



第9圖 土器実測圖 2



第10図 土器実測図 3

る。器形は立ち上りも低く内傾して、全体に矮小化している。第9図-18の坏蓋は天井部と口縁部の境界がすでに沈線や稜で区別される段階にないといえる資料である。

以上の特徴は、7世紀前半にも比定できる。当遺跡では須恵器第1類である。また、第10図21・22の無蓋高坏もこの時期と判断される。

第10図-24の坏身は高台も厚くふんばっており、体部下位から口縁部にかけて、鋭く屈曲しながら外反する。第10図-25は無高台の坏身である。7世紀末の可能性もあるが、当遺跡では、須恵器第2類に含めておく。

施釉陶器

第8図-6・8の摺鉢・第10図-26である。摺鉢については、細片のため不明な点が多いが、酸化鉄を化粧にかけており、オロシ目も明瞭であるなどの特徴から中世末～近世と判断される。26は、口縁部内面に灰釉がかかり、底部糸切り未調整である点などから15世紀末～16世紀前半に比定される。図化した資料のほか天日茶碗（大室期）がある。

表2 土器観察表

器種	図版No	計測値(cm) ()は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
壺	1	胴径 12.1 底部 4.9	球形の胴部で最大径は下位にくる。底部中央がくぼむ。	外面 縦位のヘラナデ 内面 下位にハケナデ	胎土 砂粒・黒雲母・金雲母粒子を少量含む 焼成 良好 色調 白褐色	
埴	2	胴部径 12.7	底部は丸底で、球形の胴部をもつ。	胴部は指で押圧して器壁を整える。底部内面はクシ目が一部に残る。	胎土 砂粒あり 焼成 良好 色調 外 淡褐色 内 淡褐色	復元 SD01-9
壺	3	底径 4.85	底部は丸底で、胴部へ丸味をもってつづく。	磨耗のため不明	胎土 砂粒が混じる 焼成 良好 色調 淡褐色	SD04-23
壺 (甕?)	4	底径 5.6	平底で器壁がうすい。	外面 縦位のハケナデ 内面 横位のハケナデ	胎土 砂・石英・黒雲母を少量含む 焼成 良好 色調 淡褐色	28-22?
甕 (壺?)	5	底径 (6.5)	底部は丸底で、胴部へ丸味をもってつづく。	内面 横位のハケナデ 外面 縦位の "	胎土 砂粒混じる 焼成 良好 色調 淡褐色	底部1/2残 2G上土
摺鉢	6	底径 (?)	厚く平底の底部で胴部へ大きく広がってつづく。	外面 板か金属によりケズリ。 鬼板化粧掛け。 オロシ目は6~7本を単位とする。 原体は板か。	胎土 砂・礫が多い 焼成 良好 色調 赤褐色	
甕	7	口径 (21.7)	口縁部が大きく外反する。	磨耗のため観察不能。	胎土 砂粒・黒雲母混じる 焼成 やや粗 色調 淡褐色	口縁部1/10残 36
摺鉢	8	底径 (?)	6と同じ	胴部下位より底部の脇までヘラケズリ。 オロシ目は下方より描く。オロシ目は不規則。 鉄軸を化粧掛け。	胎土 砂粒少ない 焼成 良好 色調 淡褐色	
甕	9	口径 18.25	I-7と同じ。	外面にタテハケナデ。以下7と同じ。	胎土 砂粒・金雲母、少量混じる 焼成 やや粗 色調 淡褐色	口縁部5/6残 33

壺	11	口径 (26.5)	口縁部下位で直立気味に屈曲したあと外反して口端部へつづく。	器壁が磨耗しているため観察不能。	胎土 砂粒・礫が混じる 焼成色調 淡橙色	口縁部1/7 残 I-24
高坏	12	脚径 (6)	太く短い脚部で端部を丸くおさめる。	器壁が磨耗しているため観察不能。	胎土 砂粒・黒雲母を含む 焼成色調 良好 淡橙色	1/3 残 14と同じ SP01-17
壺	13	口径 (25.1)	口縁部は断面「く」の字に外反する。最大径は胴部上位以下にくる。	器面が磨耗しているため観察不能。	胎土 混入物・砂粒あり 焼成色調 良好 淡橙色	口縁部1/6 残 SP01-8
壺	15	口径 (25.8)	口縁部がゆるやかに外反する。	7と同じ。	8と同じ	SP01-7
坏身	16		立ち上りはゆるやかに内傾する。端部は丸くおさめている。	底部の外周はヘラケズリ。体部内外面ともに横ナデ調整。	胎土 砂粒を少量含む 焼成色調 不良 淡赤褐色	
坏身	17	口径 9.4 最大径 11.7 器高 4.15	立ち上りは低く内傾する。端部は丸くおさめている。	底部と体部の境界をヘラケズリ。体部内外面ともに横ナデ。	胎土 砂粒を含む 焼成色調 良好 淡灰色	8~9G
坏蓋	18	口径 (13.4)	口縁部と大井部の区別はない。口端部は丸くおさめている。	内面 横ナデ調整	胎土 砂粒を含む 焼成色調 やや不良 淡灰色	1/3 残 35
コシキ	20	口径 22.9	体部中位に把手をもつ。把手はゆるやかに上向にはね上がる。	把手の接合はホゾ接合で装着する。体部器面は磨耗しているため観察不能。	胎土 砂粒を含む 焼成色調 やや不良 淡褐色	底部欠 32
高坏 ?	21	口径 (16.95)	器高が深く体部から口端部にゆるやかにつづく。端部を丸くおさめている。	体部下位をヘラナデ。体部内外面横ナデ。	胎土 砂粒を含む 焼成色調 良好 淡灰色	脚部欠 SP01-11
坏身	24	口径 15.6 器高 4.05 底径 10.6	体部下位で屈曲し、口端部へ外反しながらつづく。高合は端部を丸くおさめ外側にひらく。	体部内外面ともに横ナデ。	胎土 礫・砂粒を含む 焼成色調 良好 淡灰色	14
坏身 (無蓋)	25	口径 (14.2) 底径 (8.2)	底部は平底気味で口端部へゆるやかにつづく。	底部の外周をヘラケズリののち、ナデ。体部内外面、横ナデ。	胎土 少量の砂粒を含む 焼成色調 良好 淡灰色	1/5 残 1-25
小皿	26	口径 10.15 器高 2.6 底径 4.85	平底の底部で、ゆるやかに口端部へつづく。	切離しは糸切り。体部内外面ともに横ナデ。口端部内面灰釉をかける。	胎土 小礫を含む 焼成色調 良好 淡灰色	瀬戸・美濃 2/3 残 37

第 2 節 錢 貨

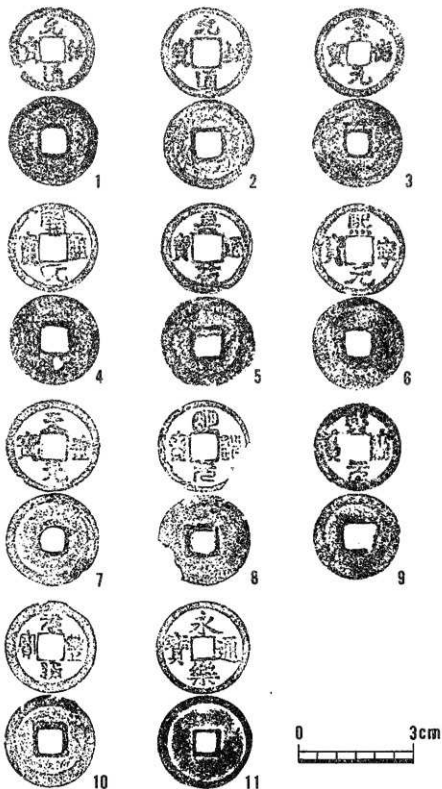
S P 04 出土銭貨 元祐通宝 2枚、景德元宝 1枚、開通元宝 1枚、嘉祐通宝 1枚、熙寧元宝 1枚の計 6枚が出土している。開通元宝をのぞくといずれも北宋銭であるが、開通元宝は武徳 4（621）年、会昌 5（845）年に造られたものがあり、当時としては製造された量も多い。このため、宋・明銭とともに日本で出土することも稀ではない。このほかの宋銭については、字体をみると、行書（3枚）、てん書（1枚）、真書（1枚）の別があり、概して、不純物が多い。書体については、比較的是っきりしているが輪郭がやや不鮮明なものや、はっきりせず輪郭が不鮮明なものが多い。

S P 05 出土銭貨 天聖元宝 1枚、明道元宝 1枚、熙寧元宝 1枚の計 3枚が出土した。字体をみるといずれもてん書体である。書体は比較的是っきりしているが輪郭がやや不鮮明といえる。

包含層出土銭貨 元豊通宝 1枚と永楽通宝 1枚が出土している。字体は、てん書と真書であるが、書体、輪郭ともに明瞭で、概して不純物の少ない铸りとなる。

表 3 出土銭貨一覧表

番号	銭貨名	初铸年	字体	直径 (cm)	孔 (cm)
1	元祐通宝	北宋 1086	行書	2.25	0.6
2	"	" "	"	2.4	0.71
3	景德元年	" 1004	"	2.35	0.6
4	開通元宝	唐 621	てん書	2.4	0.7
5	嘉祐通宝	北宋 1056	"	2.4	0.65
6	熙寧元宝	" 1068	真書	2.4	0.7
7	天聖元宝	" 1023	"	2.6	0.7
8	明道元宝	" 1032	てん書	2.4	0.7
9	熙寧元宝	" 1068	"	2.3	0.68
10	元豊通宝	" 1078	"	2.4	0.7
11	永楽通宝	明 1048	真書	2.4	0.68



第11圖 錢貨拓影

第3節 その他の遺物

その他に、石製品として紡錘車、木製品として柱根等の建築材、用途不明の鉄製品などが検出されている。

紡錘車

石製の鼓頭円錐形を呈する。上面径2.45 cm、下面径4.1 cm、高さ1.7 cmをはかる。中央部から径6 mmの円孔をうがち、下面からは径5.9 mmをはかる。下面には6本の斜線からなる三角形の格子目が刻まれ、その上にやや太い斜線が不定方向にきざまれている。また斜面上位に2本、下位に1本の刻線がきざまれ、その区画の中に6本の斜線を組合せた三角形の格子目が6組きざまれている。またそれより下位には4 mm幅の面取りがあり、2~3 mm大の不ぞろいの鋸歯状刻文がきざまれている。石質は赤味をおびたロウ石系統のものとみられる。



第12図 石器実測図

第5章 まとめ

本遺跡は弥生時代中期の*嶺田式土器、の標式遺跡として広く知られているが、その出土状況とはいえば、牛淵川改修工事の際現地表下4 m前後から採集されたということで、その層序関係や遺構・伴出遺物の実体等はほとんど知られていない。また、古墳時代遺物の包含地としても広く知られてコシキ形土器他の出土があるが、それも正式な発掘調査によるものではないために詳細な資料は残されていない。

今回の調査は、わずか数百平方メートルほどの範囲を対象に調査したにすぎなかった。まず、弥生時代については、砂層中に磨耗を受けた細片が若干包含されるという状況にとどまったのであるから、過去の*嶺田式、に追加できたものはほとんどなかった。それでも古墳時代から平安時代については、基本的な層序関係と溝等の遺構を確認できたし、中世土壇についても同様であった。よって、本調査は、いわゆる嶺田遺跡の実体のごく一部を明らかにするという意味では重要な役割を果たしたとみてよいものであろう。以下、二・三の問題についてまとめておこうと思う。

① 弥生時代について

弥生時代については、すでに述べたようにすべてが極細片で加えて激しい磨耗痕を残すものが目立った。そのため、文様や手法の観察対象となし得るものはまったくないというべき状況であった。調査時の印象では、近隣の集落等からの流出品が洪水等により流下したものと想定されたが、それも厚い砂層中に含まれる磨耗極小片という状況からの推定にすぎない。

いわゆる*嶺田式土器、の発見も、その伝えられる状況からすれば、あるいは共通する条件下におけるきわめて良好な残存といえるかも知れないが、それにしても、完型土器ないしそれに類する遺物が残存し得るであろう指定は少なくとも本調査区ではまったくなし得ないものであった。また、その伝えられる出土位置も確実なものではないらしいが、それでも本発掘より下流である可能性が強いものであった。すると、嶺田式土器を出土する可能性をもつ遺跡範囲はかなり広いものとなる可能性があるとしてよいかも知れない。

② 古墳時代について

溝状遺構5本・土壇2基のほかにピット類や焼土塊等が発見された。5本と数えられた溝状遺構は調査区中央部のA5・B5区付近にあって、その様相は南北方向と東西方向に2大別される状況で、南北方向に3本、東西方向に2本であった。南北方向の3本は互に平行する状況を呈するが、東西方向の2本は一直線上にのるものであり、ここから直交する関係を認め得る可能性があるものといえた。

ほぼ同時期とみなされた土壇2基についても、本溝状遺構の延長上もしくは周辺といえる位置にあることから、あるいは直接的な関係をもつものかともいえるが、具体的な根拠をもつわけではない。

その東側にあたるA6グリットの西南部付近には焼土塊があって、その東隣には薄い炭化層

とみられる状況もあった。その範囲はほぼ5×5mほどであって、そのうえ完型かと観察されたコシキ形土器や大型の破片となる甕形土器も伴っていたので、伴居跡としての検討も試みたが、条件を満たすまでにはいかなかった。

以上によってみると、本遺構群は明らかに集落跡の一部、それもとく近隣に住居跡群を含む遺跡とみてよいものであった。

つぎに、出土遺物についてみよう。土師器と須恵器はその年代観により、4世紀末から5世紀代までと、7世紀前半から後半までの2時期に大別され、とくに後者の遺物には完型にちかい例も含まれていて、それは土師器のコシキ、須恵器の蓋坏の存在やその数量から、今回の調査区の中心的時期と判断される。

なお、石製紡錘等は包含層からの出土遺物であるが、明瞭な伴出遺物も認められないことからその時期の確定は困難である。しかしながら、截頭円錐形で刻線のがかかれた例は、5～6世紀代の遺物が多いという一般的事例に従って、さきの4～5世紀の遺物と関連づけておきたい。

④ 歴史時代について

遺構としては、調査区の中央部、A5・B5区付近にみられた柱穴状ピット群である。これには2種があって、円形で径20cm前後の一般的な柱穴状ピットと、略方形で径70～80cmを測る例とがあった。前者のなかでは、SP01に重複する1本、SD05西側の1本はともに柱根の残存がみられた。現地および整理作業における検討でも建物の認定はできていないので、標列とでもする以外はないものとしておこう。後者については、建物跡の一部が残存確認されたものとしておこう。いずれにしても、集落跡の一部と認めてよいものであろうし、古墳時代後期後半から奈良平安時代までの連続性を認めてよいものではあろう。

中世土壇については、大きくグループ化が可能らしいこととあわせて、土壇内に厚い焼土が発見されているなどの状況から、埋葬墓と判断された。墓は、近世・近代になると、一般に墓地を形成するとされ、その起原は中世後半の仏教の葬式化にあるという。この中で、地方有力武士階級を中心として、寺院墓地が形成されはじめる。一方、村落においては、個人や有力な家を中心に埋葬墓が形成されはじめ、自家の所有地や村落の一角に共同墓地がつくられる。

今回、発見された遺構をみると、土壇内に六道銭をのぞいて副葬品らしきものは一物も認められなかったことから、その被葬者には中世近隣の農民層が推定し得る。それにしても、ある程度のまとまりをもって形成されるなど、近世に盛行する共同墓地型式の萌芽を認めることができ、今後の研究に一つの素材を提供したことになろう。

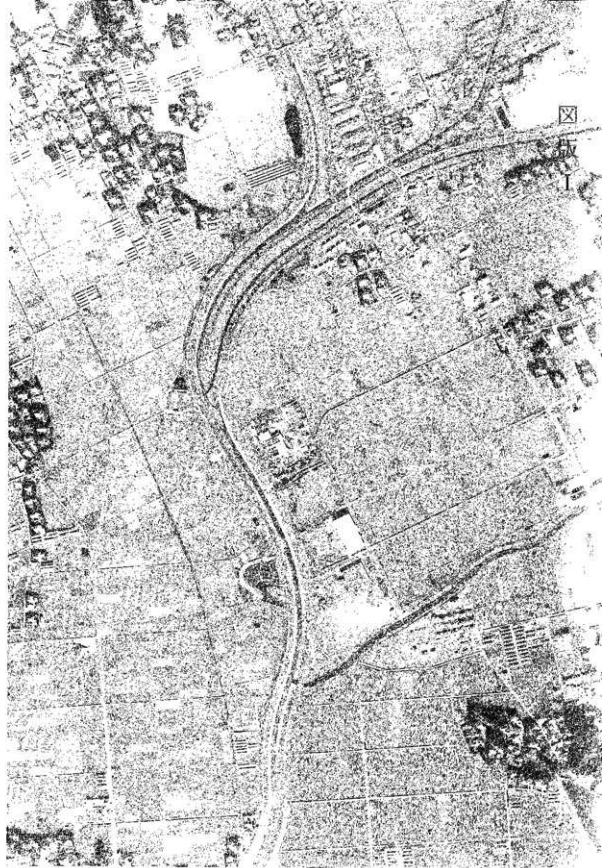
また、土壇内において発見された銭貨は、いわゆる六道銭であって、民俗信仰のあとを物語る。とくに、これらの信仰は、中世末から近世にかけてさかんになった地藏信仰のあらわれであって、遺跡周辺に展開された民俗信仰をほうふつさせる遺物といえよう。

一方、土壇周辺から採集された陶磁器をみると15世紀後半から16世紀代の遺物が認められるので、おそらく、これらの土壇の年代もほぼ同じ時期と推定される。

以上によって、弥生時代中期、古墳時代前中期・後期、歴史時代奈良～平安期の遺構と遺物についてまとめてみた。

なかでも、確実に集落が経営されて、しかも継続性を認め得る古墳時代後期から奈良・平安時代までの遺構発見は、本嶺田遺跡の具体的な資料を提出し得たものとして注目できよう。残念ながら、弥生時代中期の「掘田式」集落についてはかなり広い範囲に存する可能性があると思惟できすぎないが、それでも一応の層序関係の把握はできたといえる。今後に残された課題は大きい。いずれにしても、本嶺田遺跡は、牛淵川・黒沢川・丹野川の三河川合流地点にあることから、豊かな生産性をもたらす継続性と遺跡範囲の拡大がくり返されたことは確実といってよい。

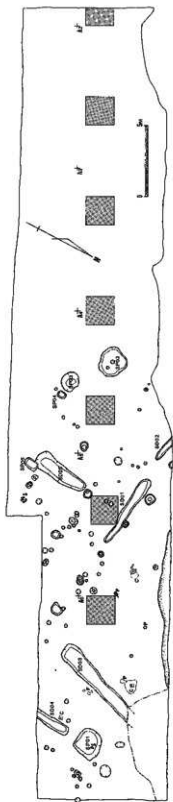
- 註1 静岡県編『静岡県の地質』 1974年
- 2 加藤賢二・大橋保夫「西方川河川改修工事における採集遺物」『森町考古9・13』
1975・1978年
- 3 静岡県教育委員会編『静岡県遺跡地名表』 1979年
- 4 静岡県編『静岡県史第一巻』 1950年
- 5 平野吾郎「小笠郡舟久保古墳の調査」『静岡県文化財調査報告書第16集』 1977年



周边环境（航空写真）

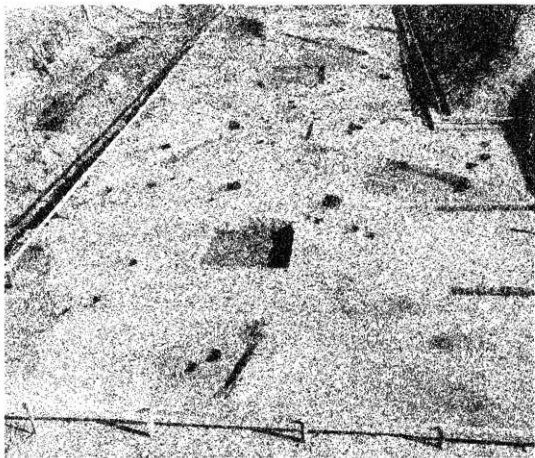


遺跡全景（西より）



遺跡全景 (北より)

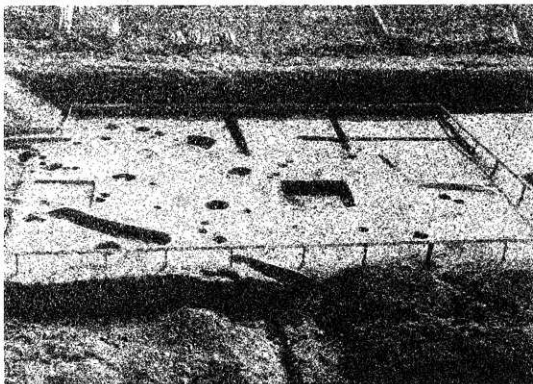




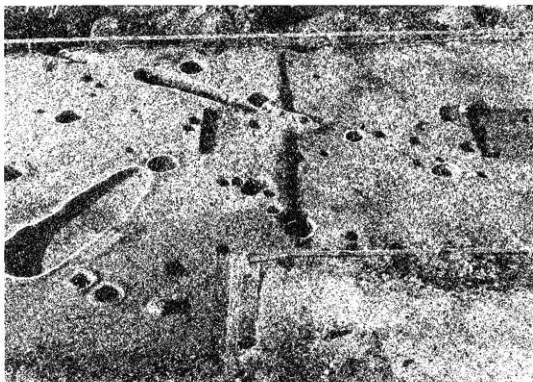
A 東区発掘区全景（西より）



B 東区発掘区全景（南より）



A 東区発掘区部分西側（北より）



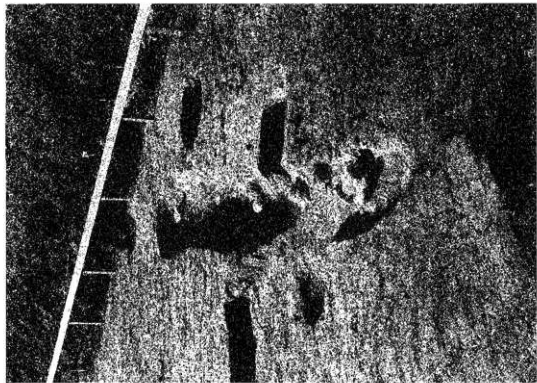
B 東区発掘区部分中央（南より）

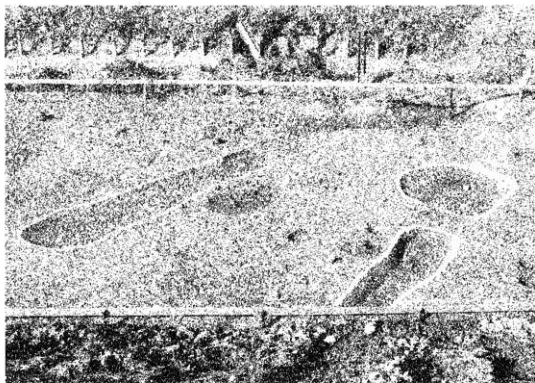
図版 VI

A 柱穴列



B SD01

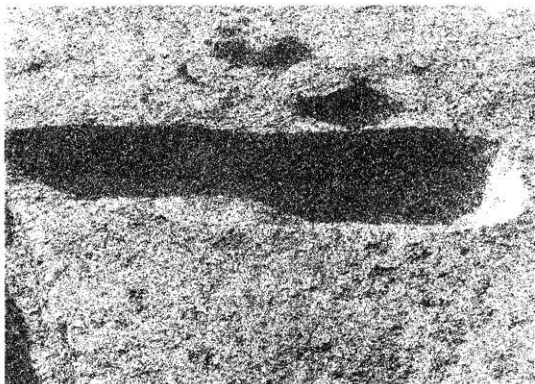




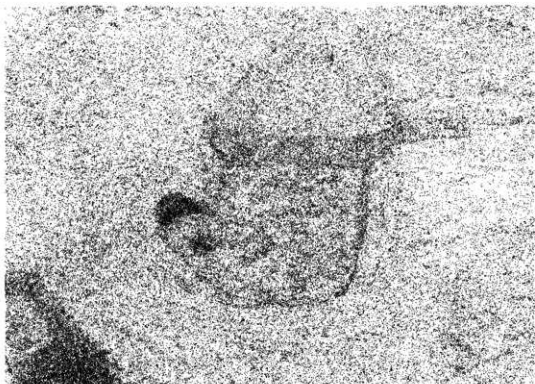
A SD03, SD04, SP01



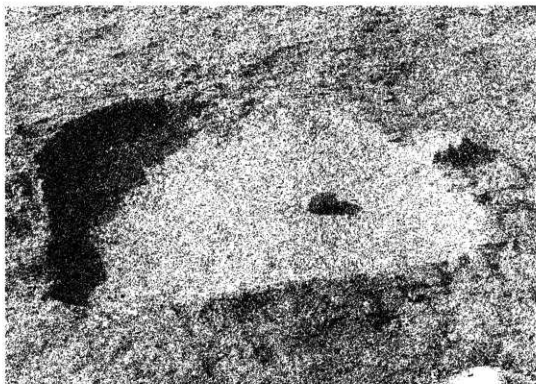
B SD02



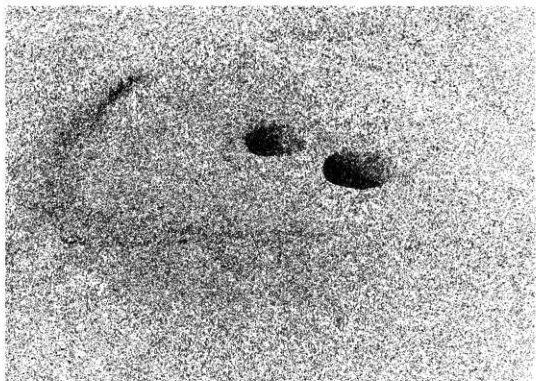
A SD04



B SD05



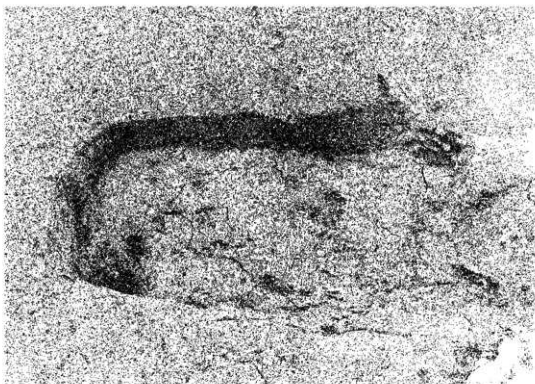
A SP01



B SP02



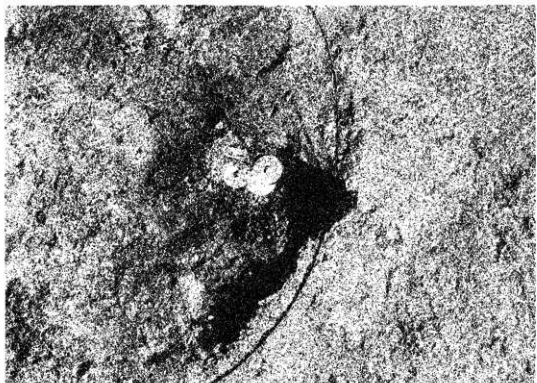
A SP03



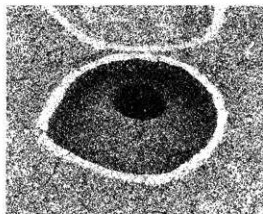
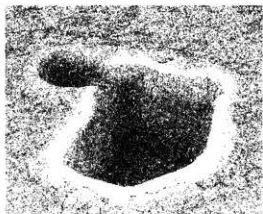
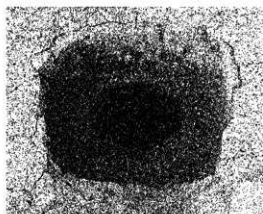
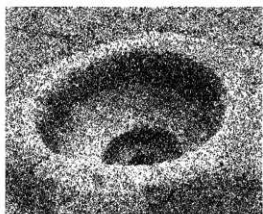
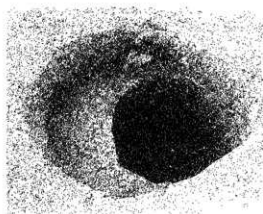
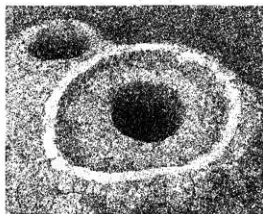
B SP05



A SP04

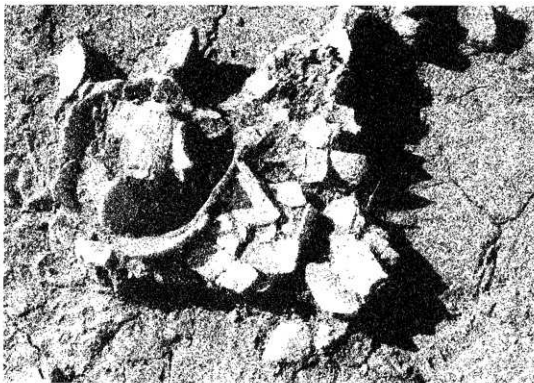


B SP04 遺物検出状況





A 土器出土状況(1)



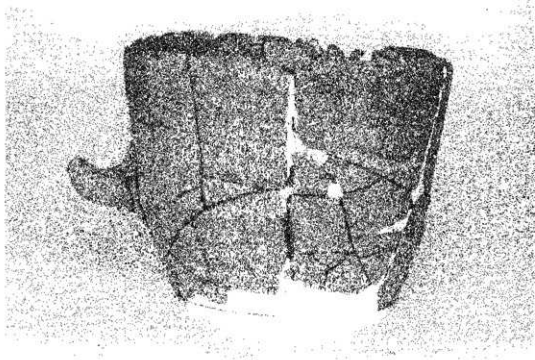
B 土器出土状況(2)

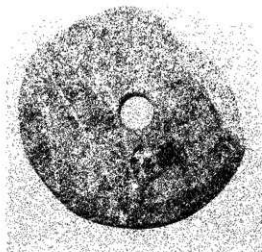
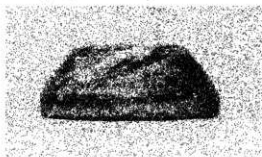
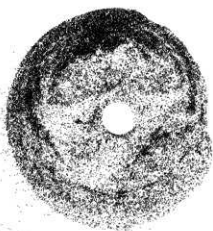
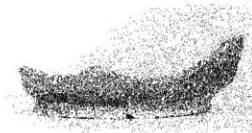
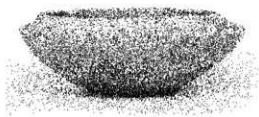


A 土器出土状況(3)

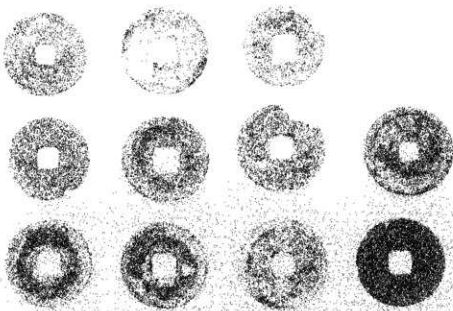


B 土器出土状況(4)



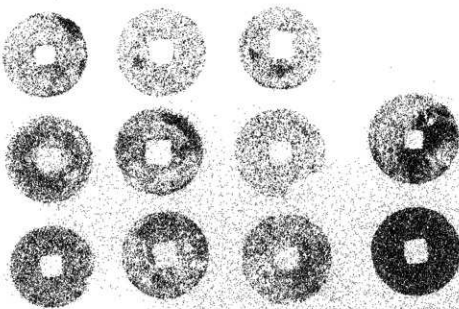


図版 XVII



(甲)

銭



(乙)

嶺田遺跡

—昭和56年度一級河川丹野川
埋蔵文化財発掘調査報告書—

昭和58年3月31日

発 行 建設省中部地方建設局
静岡県教育委員会
小笠町教育委員会

印 刷 株式会社 三 創
静岡市豊田3丁目5番30
TEL(0542)82-4031